

アトリエ 琉游舎 だより 131号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2022年5月18日発行

琉游舎 五歳の誕生日

- 5月20日で琉游舎がオープン五周年を迎えます。周年なので恒例により数字にまつわる話をします。今回は「五」。三歳では「成長へ向うか、店じまいに向うか」道の分かれ目と書きました。四歳では「成長期に入りました」と書きました。この一年で成長したでしょうか。
- 「五濁悪世」は仏教で末世を表す言葉です。天災・疫病・戦争の劫濁、誤った考え方がはびこる見濁、衆生の寿命が短くなる命濁、煩惱で悪が蔓延する煩惱濁、衆生の果報が劣悪となる衆生濁。この五つの濁りがはびこる時代です。命濁以外は現在に当てはまりそうですね。
- 「五陰盛苦」は人の体と心を構成している五つの要素（五陰）から生まれる苦しみのこと。肉体や感覚や意識などが「苦」をもたらすと考える仏教でいう「四苦八苦」のひとつです。
- どうも仏教では「五」に良い意味が与えられていないようなので、「五体投地」（頭と両肘両膝を地面につけて行う仏教の最高の礼拝方法）をしてお釈迦様（仏教）から退出します。
- 「五穀豊穰」はかつての日本人が豊かさを願ってその実現に励んだ象徴のような言葉です。五穀は米、麦、粟、豆に黍または稗の5種のこと、人間が主食とする代表的な穀物のことです。その五穀が毎年豊かに実るよう先人が努力してくれたおかげで今の日本があるのです。
- 「五風十雨」は五日ごとに風が吹き十日ごとに雨が降る、農耕に適した天候のこと。転じて世の中が平和で穏やかな状態であることのたとえです。今世界は四分五裂し、五里霧中のその霧の中で私たちは右往左往するばかりの日々を送っているのではないのでしょうか。
- 人に「五陰盛苦」がある限り「五濁悪世」は際限なく続きます。人に依るのではなく、自然（じねん）のあるがままに依ることができれば「五穀豊穰」「五風十雨」の世の中が実現できるといふ楽天的な考えを信じて、6年目の琉游舎とともに日々を過ごして行きます。

5・6月スケジュール

月 火 水

木 金 土 日

			19 映画会 お休み	20	21	22
23	24 読書会 13時半	25	26 映画会 13時半	27	28	29
30	31	6月1日	2 映画会 お休み	3	4	5 写経会 13時半
6	7	8	9 映画会 13時半	10	11	12
13	14 読書会 13時半	15	16 映画会 13時半	17	18	19
20	21	22	23 映画会 13時半	24	25	26

写経会

6月5日(日)
13時半

読書会

5月24日(火)
6月14日(火)
13時半

5月から法華経2回
目の読書会を行
います。テキストは
ご用意いたします。

5月19日(木)
6月2日(木)
映画会
お休みします

6年前の4月と5月の併せて6日間、私は御柱という不思議な存在と共に過ごしました。当時は正式に僧侶となる以前の見習い（沙弥）の立場で、なぜ自分が出家して僧侶になろうとしたかを、自分にも他人にも言葉の説明が困難なままに会社に在籍していた時のことです。御柱祭は山から切り出した木をただひたすら曳いて、最後に神社の社殿の四隅にその木を柱として立てるだけの祭です。諏訪大社は諏訪湖の南に上社本宮と前宮が、北に下社春宮と秋宮の4つの境内地を持っているため合計16本の柱が建てられます。私は上社の中で一番栄誉あるとされる本宮一の柱を曳く氏子の一員として末席ながら6日間を一緒に過ごすことができました。

八ヶ岳の麓に置かれた長さ約17メートル、直径1メートル余り、重さ約10トンの大木を、6年前の私は3日間17キロの道のりを沢山の氏子に紛れ込み、半分観察者の目で大木から百メートルほどの綱の先端あたりを曳いていました。4月初旬の八ヶ岳はまだ雪山、麓も春になりきれないこの時期に3日間の「山出し」が始まります。柱から角のように突き出す「めどてこ」に「おんべ（御幣）」を振った氏子20人以上が鈴なりにまたがった大木が、「木遣り」と「喇叭隊」と「ヨイサ、ヨイサ」のかけ声に合わせて厳粛かつ勇壮に曳かれていきます。道路との摩擦で木の底面はささくれ立ち、木屑の跡が道筋となって残っていきます。梃子と綱を操り人力だけでただひたすら曳き続ける、ただそれだけの祭です。道中は時間と技術と経験の粋を尽さなければ通れない難所がいくつかあります。民家が立ち並ぶ狭い道をほぼ直角に曲がる難所では軒先とめどてこが触れ合わんばかりの所を梃子と綱で左右に柱をコントロールして通り抜けます。「木落とし」は斜度27度の断崖を大勢の氏子を振り落としながら土煙を上げて一気に落ちていきます。宮川の「川越し」は雪解け水で柱を洗い清め、冷たい川をずぶ濡れになりながら渡っていきます。ひたすら目的地へ曳き運ぶためだけの原始的な祭は、3日目の夕方には8本の大木が御柱屋敷に曳き揃い、ひと月後の「里曳き」を待ちます。

5月は「里曳き」です。2日かけて約2ヶ月ほどの参道を本宮、前宮の所定の位置まで大木が曳かれていきます。その間、里の祭らしく騎馬行列や花笠踊り龍の舞などが繰り出し花を添えます。3日目が各社殿の4隅に柱を建てる「建て御柱」。大木はめどてこをはずされ、先端を三角錐状に切り落とす「冠落とし」が行われ、曳き上げられる柱に乗る氏子数十人を支える「七五三巻き」が木にまかれます。そしてワイヤーを付けて車地が巻かれると、ゆっくりと柱が立ちあがっていき、10数人の氏子が柱の先端でおんべを振り続け木遣りと喇叭隊とヨイサ、ヨイサのかけ声が鳴りひびき、最後に柱の先端に「御幣」が打ち付けられます。この瞬間に「大木だったものが神様になる」といわれています。これはどう言う意味でしょうか。

大木が御柱（神様）になったのは諏訪神社という社に建てられ、神官が神事を執り行ったから神になったのでしょうか。神社は氏子たちに社殿の四隅に柱を建ててもらえれば、それでこと足れりとし、運搬方法は問わないのでしょうか。であれば、私を含めて氏子たちはただの大木を苦勞して社殿まで運ぶ人足代りだったのでしょうか。6年前観察者として御柱祭の有様を観た私は「何故に人は大木を曳き続けるのか」「多くの労力と金銭と時間を使って人は何を得たのか」という疑問を抱えたまま6年後の御柱祭に今年臨みました。

コロナ禍によって今年の山出しは中止となり、トレーラーに2本ずつ大木を乗せて御柱屋敷まで運ぶこととなりました。木落としも川越しも行われず、柱の浄めは宮川の雪解け水を消防ポンプで汲み上げ放水することで代用です。目の前をあっという間に通り過ぎるトレーラーをただ氏子たちは黙って見送るしかなかったはずです。里曳きは通常通り行われたので、私は5月の3日間は6年前と同じように氏子の一員として参加しました。ただ6年前は観察者としての目でしたが、今年は信仰者の目で御柱祭を観ることができたのです。私自身の6年に渡る信行の積み重ねが6年前の私の疑問を氷解させてくれました。大木は神社に建てられたから神になったのではありません。人々が山から切り出した大木を曳き運ぶことで神になったのです。

伝承や文献や宗教学的論証を一切勘案することなく、私が体観し観心した御柱について反論は承知の上で書きます。6年前に行われて今年行われなかったことは「山出し」です。つまり人が木を曳くために曳き続けるという行為がなくなってしまったということです。運ぶだけならトレーラーで十分です。これまでも馬に引かせて運ぶこともできたはずです。今回「曳く」が「運ぶ」に変換されて初めてはっきり観えてきたことがあります。なぜ代用の利くものが代用されずに今まで人は曳き続けてきたか。それは人が曳くことだけが、唯一この大木を御柱（神様）にすることが出来るからです。神様の代理人を自認する人たちが神社に柱として建立し御幣を付けて神事を行えばそこに神が宿ると本気で信じているとしたら、私たち衆生の願いを全く知ることはできないでしょう。その時代その環境その人それぞれの願いが、木遣りと喇叭とヨイサヨイサの声で一歩進むごとに大木に込められていくのです。6日間の間に私たちはどれほど数えきれないその音と声を大木にかけてきたでしょうか、その声その音その行いのひとつひとつが、私たちの願いとして木に託され、木と一体になって自らの中に神を招き入れるのです。大なるもの（自然、宇宙、神、佛）の依り代となった大木に私たちは願いを込め続けることで、その大木を御柱に変えるのです。願いを受け入れ、神となり、その神が私たち一人一人の願いの中に住み続けてくれると信じられること、つまり人と神と願いが一つとなるのが御柱であり、私たちが曳き続けることなのです。信仰のありのままがここ琉游舎：戸井 出琉・恭子にあります。願いを大なるものと共有し、願いに導かれながら日々を過ごすこと、それは生きる喜びです。御柱は日本人の信仰のあり方の根源であり、願いととも生きることが喜びであることを私に教えてくれました。